

---

# 夏一夜

永月ほたる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夏一夜

### 【Nコード】

N7529A

### 【作者名】

永月ほたる

### 【あらすじ】

仲良しな主人公と従妹。毎年の如く一緒に食べ歩く夏祭りだったが、今年はどうも違うみたい。

## （前書き）

気まぐれに小さな頃の夏の思い出を巡らせると、大抵は夏祭りですね。手懸けたノベルから断片的に話を繋げたので、ツギハギが目立ってしまいました。

煌々と煌めく小さな田舎町。

至る所で親子連れやらカップルやらの姿が見え隠れする。

そんな中を小学校の同級生、柚奈とテクテク歩く。

今日は年に一度の夏祭りなので辺り一面、勝負浴衣の女の子ばかり。あそこにも1人、そこにも……と、りんご飴の屋台で電光に照らされているのは従妹の和美だ。

見慣れた背格好が無意識的に彼女だと感じさせる。

向こうも気付いたのだろうか……オレは普段着のままだから、柚奈の浴衣に目が向いたのかもしれない。

「あ……お兄ちゃん！」

大げさにブンブン手を振り回す素振りは相変わらずだ。

駆け寄ってくる和美に軽く手を振って返す。

「よ、久しぶり。元気してっか？」

そう言いながらセミロングに軽くクシャッと挨拶するのが2人のお約束だったりする。

「ああ、もう、お兄ちゃんったらあ、いつもいつもそうやって……」

「そう言うな、従兄妹とはいえ数少ない家族じゃないか……嫌ならやめるけど」

「ううん……いいよ、いつものことだもん」

少しばかり言い回しが悪かった気もするが、和美はハッキリ物事を言うタチなので、それに合わせている。

和美もそれには文句を言わないし、それが理由で互いを嫌うこともない。

小柄な背を見下ろすと、可愛い小さいな飴のような飾りの付いたポニーテール。

誰かと一緒に来てるみたいだが……まさかオレの知らぬ間に彼氏の1人でもできたのか？

ちよつと興味があつて聞いてみる。

「そついや今日はオマエ、誰と来てんだよ？」

りんご飴を片手に次の標的を伺っている小動物みたいな浴衣娘に声をかける。

そついえば、たしか去年は従兄妹どうしで食べ歩きしてたつけ……。今年は柚奈も一緒に3人でのんびり回ろうかと思つていたのだ。

そんな矢先……つい先日だが、柚奈から電話が来た。

「あ、浩樹くん？今年のお祭りなんだけど……」

どうやらオレの代わりに和美へ誘いの電話をしてくれたらしい。

「和美ちゃん、別のお友達が予約済みなんだつて……だから、今年は私と2人でいいかなあ？」

ちよつと意外な反面、腐れ縁とはいえ女の子と2人きりなんていう未体験ゾーンが目の前に広がる。

柚奈と2人……それは16年間に及ぶ人生で一度も考えた事がなかった。

いやいや、もう10年以上の付き合いになるんじゃないか……なんで今さら揺れてるんだ、オレ。

「あ……ああ、別にオレは構わない……けど？」

とまあ、そんな身の上話はよしとして……和美は別の誰かと過ごすつまり一緒に行けないということだったのだ。

電話口では柚奈の声が少しばかり高くなつた気がした。

「じゃあ、決まり……だね？」

何だか複雑なテンションで受話器の先から即決御免の一声。

まあ和美も誰か一緒に行く相手がいるみたいだからいいだろうと思つたのだが。

どうやらオレと柚奈の予感はずしかった。

「和美ちゃん……逸れちゃったの？」

そう言って口調は優しくも、酷いことを言ってる自分に顔をしかめる柚奈。

だが和美は黙ったまま顔を曇らせて見上げようとしない。

「和美……」

それ以上は言えなかった。

というより、そのタイミングすらなかった。

ポニーテールの基始部、そして黄色の可愛い浴衣が小刻みに震えている。

「……うえつく……うう……」

とりあえず揺れる肩を落ち着かせようと優しく撫で包む。

「和美ちゃん……どうして……？」

もちろん先日電話をかけた柚奈だって心配している。

「和美……」

彼女の右手を取り、彼女の目線まで腰を下ろし、じっと彼女の目を見詰める。

「話してごらん……お兄ちゃんに」

「……つく、う……」

いつしか柚奈も彼女の左手を取り、オレと同じ体制になって和美の頬を拭う。

「柚奈ちゃんと……2人で行って……欲しかった……」

その言葉で和美の手を握っている手がべとついた……おそらく柚奈も。

「お兄ちゃんと柚奈ちゃん、とっても仲良しで……悔しいけど、お似合いなんだよ」

「だから……ってそんな」

だが、それ以上は何も言えなかった。

柚奈と2人見つめ合い、少し長い無言が続いた。

そして。

「あの……ね、和美、お兄ちゃんたちに言わなきゃいけないの」

「な、何をだよ？」

「和美ちゃん……」

「あのね、和美……お兄ちゃんたちにサヨナラしなくちゃ……いけないの」

不意に彼女の口から発せられた思いもろよらぬ想い。

「な……何でさ」

「そうよ、どうして……」

だが、今頃になって2人は気がついた。

いつ、どこから集まってきたのか、和美の周りには無数の蛍たち。その光が彼女の“存在”を透過してオレたちの網膜を刺激する。

和美の存在が今までのそれではないことを知るに要する時間は僅かだった。

ついさつき手に取った彼女の右手も、まるでCGの合成画像みたいで現実の透明度ではなかった。

それでも不思議と心は落ち着いていた。

たぶん柚奈も同じ……アイツは和美の左手を手にしたまま、その先にある大きくてぱっちりとした瞳に見入っていた。

それから一瞬だけオレの方を向いて、また和美へ目を向ける。

「あのさ、和美ちゃん……今夜は浩樹クンの家に泊まったら？」

またしてもオレを不意打ちする言葉の彩。

お……おいおい、それはちょっと……おいしいけど、まずいだろ……ってそんなコト。

「いや……いかにいかに、オレがダメだということではなくて、こいう展開は……」

「いいじゃない、和美ちゃんは浩樹クンに会いに来たんだよ？」

「そ……そうなのか？」

いつからか自分に向けられている視線を辿って、目の前にいる彼女に聞いてみる。

彼女は黙って、コクンと深く頷いた。

その帰り道。

いつものように和美と手を繋いで砂利道を闊歩する。

柚奈は気を遣ってか、用事があると言って足早に道を逸らした。

それが嘘であるのは今の2人にとって明々白白であるのに。

そこまで気を遣わなくてもいいじゃないか……。

とは思いつつも、ちよつとばかり感謝の念が湧くオレ。

結局のところ和美とは殆ど会話をできなかったが、その間ギュッと握り合った手の血潮を通じて何かを感じあえた気がする……。

「あまり話せなかったな……」

「う……ん……」

でも……。

「こんなに長く手を繋いでたのは初めてだよ」

時間がないことを象徴するかのような透明な笑顔。

それがオレの心の奥に心地よいまでの痛みを深く刻んでくれた。

あれからもう夜も遅くなって、時刻はすでに深夜1時……休みの日くらいしか味わえない時間帯だ。

あれからオレは和美と夜食を食べて、ようやくゴロゴロできるようになった。

「ねえ……お兄ちゃん？」

「ん……？」

背中越しに和美の可愛い声が飛び込んでくる。

「私のこと……嫌いになった？」

ちよつとだけ震え気味の細い声。

「さあ……な」

「はあうゝ、いつも誤魔化すんだから……」



「あんまダダッ娘してると追い出すぞ？」

和美を見ていると、可愛くてついつい意地悪く振舞ってしまう。

「あう……いじわるう」

そうして、いつものように反応を楽しんでしまう

「はは、オマエはいつまでたっても変わらないなあ……」

そう言つてちよつと後悔した。

「悪い……そんな意味で言つた訳じゃ……」

「ううん、こんな姿になつてもお兄ちゃんがいつものようにしてくれて、嬉しいよ」

頬を伝う涙と思われるそれは、てらてらと妖しい光を放つまるで蠟燭の雫のようだった。

「ねえ……お兄ちゃん？」

「ん……何だ？」

「お兄ちゃんは……いつまでも和美のお兄ちゃんだよね？」

「バカか？当たり前だろ」

「ああ……よかった……ホントに……」

そう言つて和美はオレの右腕にしがみついた。

オレには、それが何か得体の知れない恐怖からの逃避であることが分かった。

「和美……」

「ん、なあに？」

「さよならなんて言わないよな？」

「……」

「オレはおまえのこと片時も忘れたことはない、それはこれからも同じだ」

もはや70%以上が透明で見えない、微かな肉体の形跡に話しかける。

「もし現実の世界で終えないなら、せめて夢の中でだけでも待っている」

「……おにい……ん……」

立体感のない透明な液体が勢いを増す。

「だから……また……いつでも来い」

そう言つて華奢な身体をしっかりと包み覆うように抱きしめた。

「ありがとう……おに……い……ちゃ……ん」

和美の身体が透明感を増す。

もう髪の毛も見ない。

辛うじて大好きな大きい円らな瞳の中央部が見えるだけ。

「和美！待ってるからな、いつでも戻つて来いよ……」

薄れゆく肉体の最後は柔らかく温かい笑顔だった……。

「……つくしろう！」

ただ1人の広い部屋の中で憤り、悲しみ、思い出……様々な感情や情景がフラッシュバックする。

大好きだった、たった1人の従妹。

「ぜったい……来いよ……また……ここに」

そうして男らしからぬ皺くちな顔を洗つて、少しでもこの感情が落ち着くのを待つ。

しかし、どうも神様はイベントを与えてくれたらしい……それも悪趣味な。

がちゃ……！

これは紛れもなく玄関からの音……オレの家か？

これだけ鮮明に鼓膜へ届く音だ、言うまでもなくココだろう。

もしや泥棒、はたまた強盗か……鍵を閉め忘れたか？

こんなシリアスな状況に加えて荒らしとは何て疲れる1日なんだ。

その気配は足音を殺して居間へと向かっている。

しかし、残念ながら今のオレはものすごく機嫌が悪い。

片手に懐中電灯、他方には一升瓶……呑んでてよかった、八海山！

そのまま一気にカタをつけてしまおうと、居間の入り口で敵を待つ……。

そして、暗順応したオレの足元にヤツの爪先が見えた瞬間……！

すかつ……！

「あわ……ッ！」

てつきり大人かと思い、自分の肩の高さ辺りを狙って八海山をフルスイングしたのだが……。

「ん……きゃ、ぎゃああゝっ！」

それに続いたのは出刃包丁でもワルサーp38でもなく……。

「ちよちよちよ……ちよつとおゝ何なのよ、お兄ちゃん！」

和美……？

「オマエ……和美か……？」

和美の顔を見て心のどこかで何か一段落したのだろうか。

自分でも不思議なくらい落ち着いて、それでいて可笑しなコトを自分の意志で発していた。

それからオレは和美にこっ酷く叱られた。

真夜中の丑三つ時に玄関の鍵も締めずにいたこと。

いきなり一升瓶で襲ったこと……でもこれはオレを驚かそうと電気をつけずにこっそり入ってきた小娘にも責任がある。

そしてやはり、あの一言だった。

まあ……言われるがまま、されるがままにオレは小一時間も説教を受けたのだが。

それにしても、さっきまで一緒にいた彼女は何者だったのだろうか？  
どうやら後から登場した和美は、本当にクラスの友達と祭りへ行つてたみたいで、今まで向かいの晶子ちゃんの家にいたそうだ。

でも、それまでの奇妙奇天烈な話をしたところで口うるさいコイツの説教がフリータイムに突入するだけなので黙っていた。

死んだ者が年に一度だけ甦り、小さな生命となって故郷へ戻ってくる。

夏の暑さにも負けず、残された者たちへ自分の“存在”をアピールする舞台。

この地では8月中旬、夏祭りの時期になると多くの蛍が集まる。祖先が自分の末裔を伺いに戻ってくるのだ。

「お帰り……どうだった？」

ゆつくりと落ち着いた口調で1匹の蛍に声をかける青年……およそ10代後半といったところか。

「楽しかった……とても」

「それはよかった」

につこりと微笑んで彼女の帰りを喜ぶ。

「お兄ちゃんも行けばよかったのに……いつも籠ってばかりで……」

「わかった、わかった……じゃあ来年は一緒に行こうか？」

お兄ちゃんと呼ばれたその青年は、彼女の円らで大きな瞳に満遍の笑みを絶やさず送る。

「あの人たちには、オマエの姿が見えていたみたいだね」

「え……そんな、もしかして……後を付けてたの？」

「はは……勘だよ、とても楽しかったって……顔に書いてあるよ？」

「え、あ……あわわ……」

「でも、どうやら図星だったようだね」

「う……ん、あの“お兄ちゃん”も……とても優しくて、いい人だったな」

そんな機嫌のよい彼女の目の前に彼は寄る。

そして、その少女の右手を取ってぎゅっと軽く握った。

「オマエはいつもこうしないと人と話ができなかったからな……」

「あは……それ、向こうのお兄ちゃんも同じコトしてくれたよ」

「へえ……それはそれは……」

少し驚いたかのようにであったが、彼は話を進める……。

「話してごらん……お兄ちゃんに」

この時期に集う魂は数多の祖先の霊。

もしかしたら、それは自分の前世を生きたそれかもしれない……。

同じ本質から派生しながらも、異なる時代を生きる魂たち。

もしかしたら従兄妹の前世は兄妹だったのかもしれない。

< 完 >

（後書き）

自分の前世って気になりますね……自分の祖先だったりしたら驚きです。初投稿でベタなものですが、ここまでお付き合い下さり有難うございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7529a/>

---

夏一夜

2011年1月19日23時22分発行